

ソグド人の交易活動と香料の流通

荒川 正晴

はじめに

ソグド人が、彼らの出身地であるソグディアナを離れ、本格的に東方世界に向けて交易活動を始めたのは、およそ紀元後1世紀のことであった。それから約1000年間、彼らは主にソグディアナ以東のユーラシア世界（以下、ユーラシア東部世界と呼ぶ）において国際商人として活躍したが⁽¹⁾、とりわけ唐帝国やイスラーム帝国が台頭してくるまで、なかば独占的に同地域の国際交易を牽引した。彼らが扱った商品は、何れもいわゆる奢侈品の類いであり、中央アジア出土の文書に見える主立った商品だけでも以下のようなものが挙げられる。

①貴金属 [金・銀・銅 etc.]・貴石類 [ラピスラズリやトルコ石、玉 etc.]、②絹製品 [絹糸・絹織物]、③香薬類 [麝香・沈香⁽²⁾・檀香⁽³⁾・鬱金根・硃砂・樟腦・胡椒 etc.]、④人 [奴婢]、畜 [馬・駱駝・牛 etc.]

これらの商品のなかでもとくに興味深いのは、③香薬類の中の「麝香」や熱帯産の「沈香・白檀」といった高級香料・香木である。というのも、これらの香料や香木がユーラシア東方世界で出回るようになるのは紀元後になってからであり⁽⁴⁾、まさにソグド人が東方世界へ進出するとともに流通した感があるからである。とりわけ、ソグド人らが東方世界に進出し始めた1世紀は、仏教が同世界に伝播していった時期でもあった。仏教の儀礼を行うにあたり、あるいは仏具などの制作などに際して、とりわけ熱帯産の香料・香木は欠かせないものであったことを考えれば、ユーラシア東方世界においても、仏教の伝来とその普及にともない、徐々にこうした香料や香木が流通することになったと見られる。また初期の仏教経典を漢訳したものの中にソグド人が少な

(1) もちろんソグディアナ以西においても、ステップルート沿いに黒海方面やコーカサスなどにも足を伸ばしており、彼らの活動の痕跡を認めることができる。Cf. 吉田 2011, pp.60-61.

(2) 中国においては沈香と言っても、樹脂分の沈着凝集（結皮）の程度によって名称が異なる [麝香・速香・棧香・沈香] ほか、さらに品質に応じて「黄熟香・生香」などという分類もされているが、ここでは特に断らない限り、それらを総称するものとして沈香の語を用いる。Cf. 山田 1979, pp.20-21.

(3) 白檀を始め、黄檀、紫檀などの諸檀香を指す。Cf. 山田 1979, pp.257-272.

(4) 紀元前の段階では、中国などにおいては「辛夷」や「川芎」などの芳香草類が「香物」の中心であったと見られる。

からずいたことを考えるならば⁽⁵⁾、仏教の伝来そのものにもソグド商人が関わっていた可能性は十分に認められる。こうした認識に大過なければ、ユーラシア東方世界における仏教や香料・香木の普及は、ソグド人の交易活動と密接に関わるものであったと言えよう。

これまでユーラシア東方世界における香料の交易については、海上交易が本格化する9世紀以降については、まとまった研究はあるものの〔林天蔚 1960, 土肥祐子 2017 ほか〕、それ以前となると、検討できる史料が僅少であるということもあり、あまり深く検討されてこなかったように思う。そこで本稿では、この欠落を補うべく、ユーラシア東部世界において活躍した国際商人のソグド人が、この時期にどのような香料貿易を行っていたのかに焦点を定めて検討しておきたい。

I. ソグド商人の交易範囲

国際商人としてのソグド商人の東方活動については、陸上ルートを中心に捉えるならば、以下のように大まかに四期ほどに分けて考えて見ることができよう。

- (i) 第Ⅰ期（1～4世紀）
- (ii) 第Ⅱ期（5世紀くもしくはく4世紀後半）～7世紀前半）
遊牧勢力の台頭とソグド人のステップ地域への進出。植民聚落の拡散と定着
- (iii) 第Ⅲ期（7世紀前半～8世紀中葉）
唐帝国の中央アジア支配とイスラーム勢力の台頭
- (iv) 第Ⅳ期（8世紀後半～）
唐帝国の縮小とイスラーム帝国による東方進出

これらの画期の意味については、ここで詳しく述べる余裕はないが、今ではソグド人の活動舞台は海域ルートにまで検討の場は広がっているため、この時期的区分はさらに細かく分類されることになる。ただ大まかに言えば、彼らが本格的に海上世界に乗りだしてくるのは、第Ⅲ期の後半から最後の第Ⅳ期ぐらいになる。

また彼らの主要な活動舞台は、ユーラシア東部世界にあるが、その背景には当時の中国方面から延びる交易幹線ルートがどこを通過していたかという問題が関わっている。というのも、ソグド人が東方への活動を本格的に開始したA.D.1世紀の史料を見ると、中国から運ばれてきた絹製品が、バクトラで南下し、インド半島の西岸方向に延びていたことがうかがえるからである。すなわち、一世紀後半ごろに書かれたエジプト在住のギリシア人商人の見聞録である『エリュトゥラー海案内記』（第六十四節）〔村川 1993, p.142〕の一節には、以下のようにある。

ここの地方の後に既に全く北に当たって或る場所へと外海が尽きると、其処にはティーナイと呼ばれる内陸の大きな都があり、此処からセーレスの羊毛と糸と織物とがバリユガザへとバクトラを通じて陸路で運ばれ、またリムリケーへとガンゲース河を通じて運ばれる。

(5) 仏教伝来当初における漢訳経典の一つである『中本起経』（後漢、康孟詳訳）を始め、ソグド人と見られる人物が少なからず訳経に関わっている。

このティスの地方へは容易には到達することができない。というのは、此処からは稀に僅かの人が来るに過ぎないから。

この記事から、1世紀頃に「ティーナイ」から「セーレス」の羊毛と糸と織物⁽⁶⁾が、バクトゥラを通じてバリユガザまで陸路で運ばれていたことが、当時の海域で活動する商人たちに認識されていたことが分かる。

ここに見える「ティーナイ」「ティス」は、今日の China という語の起源となる語と同系統のもので、前221年に中国を統一した「秦」に由来すると解する説が有力である。またセーレスの糸と織物とは、中国産の絹糸と絹織物を意味している⁽⁷⁾。すなわち、この記述から、当時、中国方面からの主要交易ルートが、バクトリアの都である「バクトゥラ [バクトラ] (現、アフガニスタンのバルフ)」を経て、インドの西海岸にある港町バリユガザ (現、インド西部グジャラート州南東部の港市、ブローチ) に延びていたことが知られる。ちょうど、この頃、クシャーン帝国がバクトラ辺りで勃興してインドに進出してゆき、ローマ帝国や漢帝国との中継交易で栄えていたが [小谷 1996, pp.54-57; 1999, pp.86-91]、この記事はこの事実と良く符合する。またインド西海岸よりインド洋を通じてローマ帝国と海上交易で結ばれているが、この交易ルートは既に前三千年紀の「四大文明」の時代に認められるものであった。実は、ユーラシアの東西を貫通するイラン本土経由の陸上交易ルートが本格的に始動してゆくのは、紀元後にはイスラーム帝国 (アッバース朝) の都バグダードとソグディア方面が公用交通路 (ホラーサーン街道) で結ばれる8世紀後半以降の話であった。したがって、ソグド人たちが、当時のインド西海岸につながる陸上シルクロードの幹線ルートに沿って東方に進出するのは当然の成り行きであったのである。

これに関連して、ソグド人たちが話していた母語はイラン語の一派であるにもかかわらず、彼らはイラン語起源のキャラヴァン *kārvān* を使わずに、キャラヴァン隊のことをサルト *sart*、またそのリーダーのことをサルトポウ *sārtpāw* と呼んでいた。実はこの語はソグド語本来の単語ではなく、インド語のサルタ *sārtha* やサルタバールハ *sārthabāha* が、バクトリア語経由でソグド語に入ってきた借用語であった。このことは、当時、ソグド人やバクトリア人らがインド人に先導されて、もしくは彼らと一緒に東方世界に乗り出していったことを示している [吉田 1997, pp.229-230]。

以上に見てきたように、紀元後より8世紀以前の時期には、陸上シルクロードにおける東方からの幹線ルートは、アラル海・カスピ海の北を通過するステップ沿いのルートを別として、そのままイラン本土方面に単純に延びていたわけではなかったのである。もちろんイラン本土に通ずる交通路が延びていなかったとか、あるいは商人が往来しなかったなどと言うことでは決し

(6) 記事に見える「羊毛と糸と織物」は、村川が指摘するように、具体的には「真綿と生糸と絹織物」のことを指すものと考えられる [村川 1993, p.276]。ただし絹織物については、単なる生絹などではなく、錦や綾などの高級絹織物であったと考えた方が妥当であろう。

(7) 絹織物よりも、糸 (絹糸) が先に書かれていることは、絹交易と言っても、錦のような高級絹織物は別として、通常の絹織物よりも絹糸の方が有力な商品であったことを示唆している。このことは後代においてもほぼ同様である。

てないが、ソグド人のソグディアナ以西への交易活動は、ステップルートと異なり、イラン本土への進出は困難であったと考えられる。突厥がエフタルをササン朝ペルシアと挟撃して破った後、交易交渉のためにソグド商人をササン朝に派遣したが、これが即座に拒絶された事実は、ソグド商人のイラン本土への進出が困難であった状況をうかがわせる⁽⁸⁾。彼らソグド商人にとっては、ステップ沿いでのソグディアナ以西への活動を別にすれば、ソグディアナ以東がその主要な活動域であったのである。

このことは、また陸上ルートに関しては、8世紀以前にあってはソグディアナ以西の商人が東方世界に進出しにくかったことも意味しており、1世紀より6世紀ぐらいまでは、ユーラシア東方部における国際交易はほぼソグド人の独擅場であった。

ところが、同地域世界が唐帝国、さらにイスラーム帝国の領域下に組み込まれたことにより、そうした状況は崩れた。とくに7世紀のササン朝ペルシアの崩壊とそれに続くイスラーム帝国の成立により、なおユーラシア東方世界でのソグド商人の存在は大きかったものの、ペルシア商人やユダヤ商人らが改めて同世界に進出していったと見られよう。

また近年注目を集めているのは、ソグド人による海域ルートでの交易であるが、これについても、インドより以東の海域世界に早くより乗り出していたことがうかがえる。ただそれが本格化するのには8世紀にまで下るものと見られ、さらにそうした貿易活性化の前提には、ソグド人らがペルシア人に依存するかたちで一緒に活動していたことがあったと指摘されている〔中田 2015； Nakata 2016〕。

こうした状況のなか、ソグド商人らはどのような形で香料貿易に関わっていたのであろうか。

II. 交易商品としての香薬について

冒頭に掲げた交易品のなかでも、破格に高く取引されたのが麝香である。動物系香料として有名な麝香は、生薬としても貴重なもので、おそらくは金よりも高価な価格で取引されていたものと見られる。このほか香薬類については、その種類は多岐にわたるが、なかでも麝香以外で高額で取引されたのが「沈香・鬱金花・白檀・丁香」である。

今、8世紀のトゥルフアンで取り引きされていた主要な香薬類を列举すると、以下の通りである。

1. 麝香、2. 沈香⁽⁹⁾、3. 鬱金花、4. 白檀、5. 丁香、6. 青木香、7. 甘松香、8. 硃砂

これらは、トゥルフアン出土の「唐天宝二載（743）交河郡市估案」に列举されていた香薬であるが、そこに伝えられるデータによると、1～5の香料類はどの商品よりもきわめて小さな単位（1分=0.4g）で取り引きされていたことが分かる。同史料に見える香料類の価格差を高低順にそれぞれに整理すると以下ようになる。（池田 1979, pp.458-459, 池田 2014, p.733）

(8) 6世紀の東ローマの歴史家であるメナンドロスが残したギリシア語史料参照。内藤 1988, pp.376-378。

(9) 価格から見ると、沈香のなかでも最高級のもの、いわゆる「迦羅」（迦藍木）というものであった可能性は高い。Cf. 山田 1979, pp.27-33。

麝香 1分 上 (120文)、次 (110文)、下 (100文)
沈香 1分 上 (65文)、次 (60文)、下 (50文)
鬱金花 1分 上 (60文)、次 (50文)、下 (40文)
白檀 1分 上 (45文)、次 (40文)、下 (35文)
丁香 1分 上 (35文)、次 (30文)、下 (25文)

青木香 1両 上 (16文)、次 (15文)、下 (14文)
甘松香 1両 上 (16文)、次 (15文)、下 (14文)
硃砂 1両 上 (9文)、次 (8文)、下 (□文)

これを見ると、香薬類のなかで、明らかに「分 (約 0.4g)」単位で取引されていたものと、「両 (約 40g)」単位で取引されていたものとに分けられていたことが分かる⁽¹⁰⁾。つまり、「分」単位で取引されていた麝香から丁香までと、「両」単位で取引されていた香薬類との価格の差はきわめて大きく、同じ香料と言っても、麝香～丁香は、香薬類の中でも破格に高く取引されていたらしいことがうかがえる。国際商人たるソグド商人にとって、多くの香薬があるなか、これらは有力な商品となっていたと見られる。ちなみに最高級品となる麝香で見てみるならば、先の史料に基づけば、わずか1両の取引で銅銭 12,000 文になる。これはおおよそ銀銭で 375 文ほどになり⁽¹¹⁾、当時の物品価格で見れば、牝馬 3 疋分⁽¹²⁾、女奴隷 3 人分⁽¹³⁾ の価値に相当するものであったことが推測される。先の価格表で見れば、沈香の価値は麝香の約半分、白檀はその三分の一ほどであったことがうかがえる。

ここに挙げた他にも、当時ユーラシア東部世界において乳香と同一視されることの多い「薰陸香」が広く流通していたことがうかがえる⁽¹⁴⁾。たとえば日本の例ではあるが 8 世紀の「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」⁽¹⁵⁾ には、寺の資産として以下のような香薬が記録されている。

(前略)

合香壹拾陸種

丈六分肆種 熏陸香一百六十八兩、寺買

沈水香十兩、淺香三百八十五兩

(10) 唐代の容量については、おおよそ次のようである。1石=4鈞、1鈞=30斤、1斤=16兩、1兩=10錢、1錢=10分 (1斤=661g)

(11) 7世紀ぐらいの銅銭と銀銭との交換レートが、おおよそ 1:32 ぐらいで安定していたことは、池田 1975, p.62, p.99a 注 (99) 参照。

(12) 牝馬の価格については、同じく「市估案」から、「草馬壹疋 次上直大練玖疋 次捌疋 下柒疋」とあり、草馬 (牝馬) 1疋が、大練 9～7疋 (銅銭約 4,100～3,200文) であることが知られる。池田 1979, p.453。

(13) 女奴隷の価格については、吉田・森安・新疆ウイグル自治区博物館 (1989) 参照。

(14) 薰陸香と乳香との関係については、長い議論の経緯があるが、まずは山田 1979, pp.113-131 が参考になる。

(15) 寺院の縁起を冒頭に記した、寺院資産の帳簿。天平十九 (747) 年につくられた。敷地建物、仏像、經典、仏具、雑具、稻穀、米錢、財物、寺領、住僧、奴婢などの数量などがこまかく記載されている。

薰陸香卅六兩、青木香卅八兩

右天平八年歲次丙子二月廿二日、納賜

平城宮 皇后宮者

佛分壹拾種 白檀香四百七兩

沈水香八十六兩

淺香四百三兩二分 丁香香八十四兩 安息香七十兩

二分 薰陸香五百一十一兩 甘松香九十六兩

楓香九十六兩

蘇合香十二兩 青木香二百八十一兩

聖僧分、白檀香肆伯玖拾陸兩

塔分、白檀香壹伯陸拾兩

合藥壹拾肆種

丈六分、麝香壹兩

右天平六年歲次甲戌二月、納賜平城宮

皇后宮者

法分貳種 鬱金香九兩

甲香十四兩

聖僧分捌種 香附子八十兩

□唐香 卅六兩

金石綾州六兩 五色龍骨八十七兩 紫雲十六兩

桂心卅四兩 鬼白十四兩 甘草一百廿八兩二分

通分參種 冶葛八兩二分、芒消三百八十二兩三分

無食子卅四兩

本資材帳には、「香」として薰陸香をはじめ、計10種類の香（沈水香・淺香〔棧香〕・青木香・白檀香・丁香香・安息香・甘松香・楓香・蘇合香）が列挙されている。ただ麝香に関しては、「藥」として挙げられている。わずか1兩の数量しかなく、当時、「香」としての使用よりも、貴重な生薬として主に用いられていたことがうかがえる。

また所蔵される数量を見れば、当時の法隆寺にあつては、各種の香薬類のうち薰陸香（724兩）および白檀（1,063兩）・淺香（788兩2分）⁽¹⁶⁾を、他の香料に比して格段に多く所蔵していたことが分かる。

また同じ時期に造られた「大安寺 伽藍縁起并流記資財帳資材帳」にも、「仏物」「法物」「通物」として、麝香（2兩2分）や白檀（2斤8兩3分）、沈香（59斤15兩）、淺香（29斤6兩3分）、丁香香（1斤8兩）とともに、薰陸香（171斤9兩2分）が記録されている。数量を比較して見

(16) ここに見える淺香は棧香のことを指していると見られる。一般的には、樹脂分が凝縮し重くて水中に沈むのが沈香であり、軽くて水面で半浮半沈するものが棧香と理解されている。つまり、棧香は沈香のなかでも質のやや劣るものを指している。Cf. 山田 1976, p.185; 1979, p.20.

れば、大安寺においても薫陸香が飛び抜けて多かったことが知られる。

このように薫陸香が沈香や白檀などとともに広く流通したものであったことがうかがえる。ただし、この薫陸香は乳香と同一視されることが多いものの、多くはアラビア産などの乳香そのものではなく、インドで加工された種々の樹脂系香料から成るものとされる。アラビア産の乳香がユーラシア東方世界に広く出回るようになるのは、イスラーム商人が積極的に活動してゆく8世紀以降のことと推測されよう〔山田 1976, pp.84-96; 1979, pp.126-130〕。

中央アジア出土文書のなかでは、乳香の記載は9世紀に降り、敦煌文書の「吐蕃期敦煌乾元寺料香帖」(P.3047)に、「鬱金、乳頭香、檀香」の三種の香料が乾元寺に納められていたことが記録されている⁽¹⁷⁾。本文書に見える「乳頭香」というのは、乳香本来の呼び名と推測される⁽¹⁸⁾。

薫陸香ではなく「乳頭香」と明記されていることを考えると、この敦煌文書に見られるものは、アラビア半島方面からもたらされた可能性は高いが、残念ながら陸上ルートでの情報とその取引価格が今ひとつ明らかではない。また同文書に見える鬱金も鬱金花(サフラン)もしくは鬱金根(ウコン)の類いかと思われる〔cf. シェーファー 2007, pp.212-214, pp.315-316〕が、鬱金花であれば、沈香と同じレベルの高級香料となるが、これについてもその取引の詳細は詳らかではない。

そこで、本稿においては中国で高額ながらも盛んに流通し消費されている香料として、麝香および沈香と白檀を取り上げ、ソグド商人がこれらの香料をどのように交易していたのかに絞って検討しておきたい。

Ⅲ. 最高級香料の麝香とソグド人の交易活動

先に見たように、香葉類のなかで、最も高値で取引されていたのは麝香である。麝香は、雄のジャコウジカの腹部にある小さな香囊(ジャコウ腺)から得られる分泌物を乾燥したものであり、産地は、ネパール、ブータン、チベット、青海、甘肅、陝西、四川、貴州雲南などにわたる。

ソグド人の交易活動を伝える文書史料として、最も早期に属するのが、いわゆる「ソグド人の手紙」(五件)であるが、その中に既に麝香のことが見えている。それが、「ソグド人の手紙」Ⅱである⁽¹⁹⁾。内容から見て全体をいくつかのパートにわけることができるが、ここで引用したいのは、手紙の末尾部分になる。手紙を書いた Nanai-vandak が、サマルカンド在住の Varzakk (実際は Nanai-thvār · Varzakk 親子)に宛てて、サマルカンドに残してきた彼の資金の管理と適切な運用および彼の息子の保護を依頼した部分に続けて、以下のように記している〔吉田・荒川 2009〕⁽²⁰⁾。

(17) 姜伯勤 1994, p.132; 鄭炳林 2011.

(18) 山田によれば、「乳頭香」を略して「乳香」と名付けるようになったとされる。山田 1979, p.132.

(19) 1907年、敦煌西の烽燧址より出土した紙文書(スタイン第2回探検将来文書)。文書は都合五件見つかり、その内容はすべてソグド人が書いた手紙。ここに掲げたものは、そのうちの一つ(A. L · II)。現在、大英図書館に所蔵される(Or.8212/95, 99)。書写年代は、4世紀はじめ(312-313)ごろ。

(20) この手紙については、これまでも以下の文献において解説されてきた。Harmatta 1979; 榎 1980; Sims-Williams 2001. 手紙全般に関する研究・解説については、Hansen 2012, p.268, note 15 (ハンセン 2016, p.358)に詳しい。

そして私は敦煌にいる Wan-razmak 宛てに、(彼が) あなたに送ってくれるようにと、Takut のものである 32 個の麝香 (の小囊)⁽²¹⁾ を送りました。そちらに届けられましたら、あなた様はそれを五等分し、そこから Takhsich-vandak は五分の三取るべきであり、Pēsakk は五分の一取 (るべきであ) り、あなた様は五分の一取 (るべきであ) ります。

この手紙末尾の部分から、Nanai-vandak が、おそらくは河西・青海方面などで獲得した麝香を、敦煌経由でサマルカンドに送り届けようとしていたことが知られる。この麝香に関しては、手紙に指定されている三名、すなわち Takhsich-vandak (Nanai-vandak の息子)、Pēsakk および Varzakk が、送られてくる麝香 32 個の配分に預かるべき立場にあったことがうかがえる。先に検討したように麝香は、「分」という僅かな量の単位で取引される高級香料のなかでも最高級のものであり、麝香 (の小囊) 1 個分であっても相当な価値を有することは容易に推測できる⁽²²⁾。

既に家島彦一により、麝香を生み出す麝香鹿の生息地と麝香の流通ルートが検討されているが [家島 2006, pp.533-557]、それによれば、河西地域からソグディアナへ送られた麝香は、おそらくは家島が指摘する「ソグド産麝香」と呼ばれるものに相当するものであろう [家島 2006, p.539]。すなわち、チベットや雲南・四川・青海方面に生息する麝香鹿の麝香を買い集め、それを河西経由でソグド本国に送ろうとしていたと見られる。そこから、さらに西アジア方面へ流れていったものと推測される。

また麝香とソグド商人については、アブー・ザイド・アルハサン『中国とインドの諸情報 第二の書』(家島 2007, pp.62-64) にも、大変に興味深い記事が伝えられている。

かつて、われわれは中国に [陸路で] 踏み入ったことのある一人の人物と会見したことがある。その人の語るところによると、[旅の途中で] 彼は皮袋に入れた麝香を背負って運ぶ一人の男に出会ったという。その男は、サマルカンドを出ると、徒歩で中国の町々を一つ一つ横切って、ついにはハーンファー (広州) に達した。そこは、他ならぬスィーラーフを出た [海上] 商人たちが集まる場所である。[麝香について、さらに詳しく説明すると、] つまり中国産の麝香鹿が生息する土地と、チベット産の麝香鹿が生息する土地とは同じ一つの土地であって、両者に違いはない。なぜならば、中国の人たちは彼ら [中国人] の [一番] 近くに生息するもの [麝香鹿] を、一方のチベットの人たちは彼ら [チベット人] の [一番] 近くに生息するものをそれぞれおびき寄せて [麝香を採集して] いるからである。ただし、チ

(21) 通常は麝香鹿の香囊を採取し、そのままそれが流通していたと見られる。正倉院にもこの小囊が残っている。このことから、ここも麝香 32 個を小囊 (香囊) の数量と解した。参考までに、ピールーニーによれば、麝香が中国から海路で運ばれるとき、壺 (中国陶磁器) の中に麝香囊を入れて蓋を密封していたこと、また麝香囊の重さは 20 デルハム (約 60g) もしくはそれ以上であることなどを伝えている。家島 2006, p.539。

ただし vaissière は、この 32 の単位は、明らかに vesicle であると指摘し、この部分を「32 (vesicles of musk)」と解している。また彼は、1 vesicle を 25g と見積もっている。Vaissière 2002, pp.52-53。

(22) 品質の差はあるが、先に見たように麝香はわずか 1 両 (40g) の取引で奴婢や馬を数名もしくは数疋購入できる価値をもっている。

ベトナム産の麝香の方が、中国産のものより上質であるというのは、ただただ以下の二つの条件によっているに過ぎない。その一方の条件は、チベットの境界に生息する麝香鹿が餌としているものは良質の甘松香であり、一方、中国の土地に隣接して生息する麝香鹿が餌としているものは、あらゆる種類の野草であることによる。もう一つの条件は、チベットの人たちは麝香囊を〔採集時の〕そのままの状態に保つが、一方、中国の住民は彼らの入手した麝香囊に混ぜ物を加えるからである。さらにまた、彼ら〔中国人〕の麝香が海を通じて運ばれるということ、そして〔海上輸送の途中で〕湿気が付着するという〔悪〕条件も加わること〔で品質が劣化すること〕に原因する。

本史料には、麝香がチベットと「中国」⁽²³⁾で獲得できることが記されているが、ここで注目されるのは、チベットではなく「中国」で入手した麝香は海を通じて運ばれていたことが特記されていることである。また、この記事にはチベットの麝香鹿の方が、「中国」で採れるものよりも良質であることが、いくつかの理由を挙げて指摘されている。

先の「ソグド人の手紙」に見える麝香については、本史料に言うチベット産か「中国」産かは特定できないが、こうしたソグディアナ経由で西アジア方面に運ばれる麝香の流通ルートが、早くより形成されていたことが確認できる。

以上より、チベット産およびその近縁に位置する「中国」産のものは内陸アジアルート（ソグディアナ経由、ソグド産麝香と呼ばれる）で西アジアへ、また「中国」産については別に、所々で買い付けられた後、主に広州から海上ルートで西アジア方面に運ばれたと見られる。つまりソグド商人にとっては、麝香はユーラシア東方世界で売りさばいてゆく対象商品というよりも、多くは陸・海上ルートを通じて、西アジア方面に送る商品となっていたのである。

IV. 香木（沈香・白檀）とソグド人の交易活動

(1) 沈香・白檀の主な流通経路について

本節では、麝香に次いで高額で取引されていたと見られる沈香と白檀について検討しておきたい。まず沈香は、ユーラシア東部世界において「香と言えば沈香」と言われるほど、同世界を代表する香木となってゆくが、その産地は、インドおよび中国南部～海南島・ベトナム・カンボジア・マレー・スマトラ・ボルネオ・フィリピン、モルッカなどであるとされる〔山田 1979, p.2. なお家島 2006, pp.510-519 に、イスラーム史料を踏まえた詳しい産地の説明がある〕⁽²⁴⁾。

また白檀は、沈香に次いで高額で取引された香木であったが、産地についてはマレーシアあるいはジャワ東方の諸島を原産地とし、そこからインドなどに移植されたとされる〔山田 1979, p.264. 家島 2006, pp.520-521 も参照〕。

沈香・白檀は、麝香とともに、何れもソグド人が取引する高額な香木であったが、麝香と異な

(23) おそらくは青海・甘粛・陝西・四川・貴州雲南あたりと見られる。

(24) ジンチョウゲ科の植物で、熱帯地域の雨の多い高原地帯で生育する。黴の影響で、木の一部分に黒い樹液が集まり凝固したもの。

り香木は重量が張る分、そもそも海上輸送向きの商品と言える⁽²⁵⁾。ただ、8世紀以前において内陸アジアルートで香木が西から東へ運ばれていたことは、後に検討するトゥルフアン文書より確認できる。東野や家島も、これら香木の中国方面への流通経路として、産地で採集・取引された後、内陸アジアもしくはインド洋を経由する交易ルートを経て中国に運ばれていたことを想定している〔東野 1992, pp. 174-178; 家島 2006, p.507〕。すなわち、中国に向けた流通経路として、インド方面から内陸アジアを経由するルートと、インドおよび東南アジア島嶼部や中国南部方面から運ばれる海上ルートの二つが推定できるのである。そこで、本稿でも沈香・檀香（白檀を始めとする諸檀香）といった熱帯産の香木が中国方面へ運ばれるにあたり、①内陸アジア経由のルートと②インド洋経由の海上ルートの二つを想定しておきたい。

なおこの二つのルートについては、家島が、白檀を始めとする諸檀香が何れも中国から西アジア諸国への輸出品であったことを説明するイスラーム史料（イブン・アルバイタル [1188 - 1248] が引用する9世紀頃のイスハーク・ブン・イムラーンの説）の存在を指摘し〔家島 2006, p.520〕、中国が西アジア向けに送る檀香の集散地となっていたことを推測していることに注意しておきたい。この状況は沈香も同様であるようで、少なくとも10世紀以前においては多くの熱帯産香木は中国市場を経由して、西アジアに転送されていた如くである〔家島 2006, pp.508-532〕。この中国市場を経由すると言うのは、東南アジア・インド産地からの舶載により、中国の港（8世紀段階では広州）に運ばれる状況を指していると考えられるが、当然、こうした背景には8世紀以降、海上交易が次第に活発化した時代状況であろう。このことは同時に、沈香・白檀などの流通経路として、内陸アジア経由のルートが次第に衰退していったことを示唆している⁽²⁶⁾。

(2) 内陸ルートによる高級香木の流通について

沈香・白檀のような高級香木について、内陸アジア経由での流通を考える場合、交易ルート上の主要都市に植民聚落を構え、彼ら自身のネットワークを構築していたと見られるソグド商人らは⁽²⁷⁾、どのように交易をすることが多かったであろうか。それを検討するうえで、7世紀の麴氏

(25) 沈香は木の内部が空洞となっている形で運ばれることが多かったと見られるのに対して、白檀は、香りが強い木の中心部材を細長い棒状にして運ばれていたと考えられる。それでもかなりの重量となり、有名な正倉院の「蘭奢待」（高級沈香である伽羅）は11kgもあり、白檀も棒1本は、法隆寺伝来のものを参考にすると、5～7kgほどもある。白檀など通常は、10本以上を束ねて運ぶので、かなりの重量になる。ただし、沈香と異なり、全体を香木材として使用できる。また白檀は多くの壁画やレリーフに描かれている。例えば敦煌莫高窟壁画（第45窟南壁西側、盛唐期）に描かれている有名な図〔ソグド商人が強盗に襲われているシーン〕や、最近公表された中国国家博物館に所蔵される北朝期の「石堂（石槨）」のレリーフに見えるソグド商人には、何れも棒状のものが表現されているが、これはこれまで言われてきたように絹織物の反物ではなく、彼らが運んでいた白檀だと考えられる。とくに「石堂」のレリーフに見えるものは、木の割れ込みまで細かく表されている。なお反物にされる通常の絹織物である練絹、生絹などでは、決して高額の商品にはならず、ソグド商人が敢えて扱う絹製品としては、まずは需要が高かった絹糸か、もしくは織物であったとしても錦や綾などの高級絹を主体としていたであろう。

(26) 山田は、「インド本土のサンダル（檀香）は古来から全く国外に輸出されていない。後代まですべてインド人の需要にあてられている。」と結論している〔山田 1979, pp.266-267〕が、前掲の『エリュトラー海案内記』（第36節）には、インドの西海岸の港であるパリュガザからペルシア湾西岸のオマナに向けて「白檀木」が交易品として挙げられている〔村川 1993, p.123〕。

(27) ソグド人の植民集落については、榮新江 1999, 2014 など参照。

(38) ソグド人の交易活動と香料の流通（荒川）

高昌国におけるソグド商人の交易状況は大きな示唆を与えてくれる。

(a) トゥルファン文書に見える香木の取引

麹氏高昌国では、商人らが交易する場は、以下に挙げるように二層の構造になっていたと見られる。

- ① オアシス国家における対外交易の窓口としての市場
- ② オアシス国家における地域内取引の市場

この二重性は、ポランニー（同 1980, p.353）の局地的（地域的）取引と遠隔地（対外）交易との隔絶性、または、アンリ・ピレンヌ（同 1975, p.121）の恒常的な商取引の場であるポルトゥス（交易港）と定期的に集まる市場（いちば）との相違を容易に想起させる。

言うまでも無く、国際商人であるソグド商人は、①の対外交易向け市場で交易をしていたと見られるが、さらに①は、(a) 奴隷・家畜の売買を管理の場と、(b) 重量で売買される商品取引の場とに分かれていた。まず (a) は、人・畜いずれも取引するにあたり、売買契約書が作成される場となっていた。実際に作成されていたソグド語の女奴隷売買契約文書を見ると、「市場」において女奴隷の取引を最終的に認可したのは、「高昌の書記長 [(原文)「cyn'cknd'y (中国人の城) dp'yrptw」] であった。

ここに見える dp'yrptw というのは、既に論じたように⁽²⁸⁾、ソグド諸国においても設けられていた官職名でもあり、同諸国では dp'yrptw は、国王の使者として各地に派遣される側近官となっていた。というのも、リフシツの解説によれば、1965 年にアフラシアブ遺址で発見されたソグド語の壁画銘文に、サマルカンドの 'Brxwm'n(ヴェアルフマーン、康居都督の払呼縵) のもとに、Chaghaniyan の使節の長として「書記長 dp'yrptw」を派遣したことが記されていたからである。さらに同銘文からは、Chach の「書記長 dp'yrptw」も 'Brxwm'n のもとに派遣されていたことが明らかとなる [Livšic 2006, pp. 59-61.]。このように、アフラシアブ遺址の壁画銘文より、「書記長 dp'yrptw」がオアシス国家を代表する使節として派遣されていたことが知られるのである。このことを踏まえて考えれば、「高昌の書記長 dp'yrptw」も、王の側近官であった可能性は高く、その立場で契約の成立を認可していた可能性は高い。

これに対して (b) では、売買にあたり「称価銭」と呼ばれる税が課せられていた。当然、香葉類の取引は、この (b) において取引され、「称価銭」と呼ばれる税金が課せられていた。「称価銭」については、既に多くの研究があるが、それによれば「称価銭」は各種商品の取引重量に応じて売主・買手双方に課税されたもので、すべて当時中央アジアで流通していた銀銭（ササン朝コイン）で徴収されていた [朱雷 1982, pp. 21-22; 姜伯勤 1994, pp. 176-179 ほか。なお称価銭に関する下記文書を引用する研究文献の網羅的な情報は、王素 1997, p. 317 に与えられている]。

トゥルファン文書には、この「称価銭」の徴収を記録した帳簿様文書が残されており、ここか

(28) 荒川 2010, pp.56-57.

らソグド商人の交易の「姿」を垣間見ることができる。

〔高昌内蔵奏得稱價錢帳〕73TAM514: 2/4 <録> <写> 『図文』1, p.450)

(一) 73TAM514 : 2/1, 2/2, 2/3, 2/4, 2/5, 2/6, 2/7, 2/9 (pp. 450~452)

- 1 起正月一日, 曹迦鉢買銀二斤, 与何卑尸屈二人邊得錢二文。即日, 曹易婆□
- 2 買銀二斤五兩, 与康炎毗二人邊得錢二文。次日, 翟陀頭買金九兩半, 与
- 3 □頭祐二人邊得□。次日, 何阿陵遮買銀五斤二兩, 与安婆□
- 4 □□□□錢五文。即日, 翟薩畔買香五百七十二斤, 鎰石叁拾□
- 5 □□文。次五日, 康夜虔買藥(藥)一百肆拾四斤, 与寧祐熹二人邊
- 6 □□頭買糸(絲)五十斤、金二十兩, 与康莫毗多二人邊得錢七文半。
- 7 □□□□五斤, 与□□□□得錢七十文。次八
- 8 □□□□二人邊得錢肆拾二文。
- 9 都合得錢一百肆拾柒文。
- 10 □□歲正月十五日 内蔵 奏
- 11 起正月□□日, 安□□買鹵沙一百七十二斤, 与康炎二人邊得□□□
- 12 □□日, 康不里昂買香二百五十二斤, 与康婆何畔陀二人邊□□□
- 13 □□□。次廿二日, 曹破延買鹵沙五十斤, 同(銅)四十一斤, 与安那寧畔
- 14 □□□□何炎陀二人邊得
- 15 □□□□文。

(前 欠)

- 16 □□□□] 價錢.
- 17 □□□□] 到 廿九日, 无稱價錢.
- 18 □□□□] 翟討頭買銀八斤一兩, 与何阿倫遮⁽²⁹⁾, 二人邊
- 19 □□□□] 倫遮買金八兩半, 与供勤大官, 二人邊得錢二
- 20 □□□□] 斤, 与安破毗多, 二人邊得錢十四文.

(都合)

- 21 □□得 錢 貳 拾 肆 文.

(後 欠)

- 22 □□□□七十一斤, 与何炎蜜畔陀
- 23 □□□□即日, 康烏提畔陀買郁 金 根八十七斤, □□不呂多二人
- 24 邊得錢一文。次廿四日, 曹遮信買金九兩, 与何刀二人邊得錢二文。即日, □
- 25 射蜜畔陀買香三百六十二斤、鹵沙二百卅斤, 与康炎顯二人邊□
- 26 錢十五文。次廿五日, 白妹買鹵沙 十 一 斤, 与康阿攬牛延二人邊得□□□。
- 27 都合得錢貳拾柒文。

(29) 『文書』『図文』ともに、「阿何倫遮」とするが、「何阿倫遮」である。

- 28 起四月五（日），康□□買銀二斤一兩，与何刀胡迦二人邊得錢
 29 □文。即日，康□希迦買糸十斤，与康顛顛二人邊得錢一文。
 30 _____人邊得錢十七文。即
 31 _____錢一文。
 32 都合得錢貳拾壹文。
 33 _____順買銀二斤，与何破延二人邊得錢二文。次
 34 _____買香八百斤，石蜜卅一斤 _____
 35 □二人邊得錢廿二□。□日，何刀買糸八十斤，□□迦門賊二人邊得錢八文。
 36 都合得錢叁拾貳文。
 37 起五月二日，車不呂多買糸六十斤，与白迦門賊二人邊得錢三文。次十二日，車
 38 不□□□□十斤，迦門賊二人邊得錢一文半。

本文書は、10行目に見えるように、王もしくは王室の財政を管理していたと考えられている「内蔵」⁽³⁰⁾が、どれほどの称価銭を誰から何時、どんな取引から徴収したのか、取引ごとにまとめて高昌国王に上奏したものである。王素によれば、暫定的に本文書を延寿十七(640)年前に置いている[王素1997, p.317]。ここに某歳の正月十五日とあるのも、高昌国において上奏日とされていた月の半ばと末ごとに、こうした上奏がなされていたものと考えられる[白須1984, pp.28-32]。

本文書に記される称価銭の徴税の内容を、日付、売・買主名、取引商品、課税額など1項目ずつあらためて整理し、それを一覧表にしたものが末尾に掲載した表である⁽³¹⁾。この一覧表から、まず次の点が明らかとなる。

「対外交易のための「市場 w'cn」で量り売りされる物品の取引は、一部の例外を除き、売り手・買い手ともに、ほとんどソグド人で占められていた⁽³²⁾。」

先の(a) 奴隷・家畜の売買を管理する場も、ソグド商人が中心となっていたことが推測されるが、そうであれば、「オアシス国家における対外交易の窓口としての市場」は、主として外来ソグド商人のための場であったと見られる。

先に指摘したように、本文書は「内蔵」の上奏文書であることから、個々の取引内容や称価銭

(30) 「内蔵」とは、王もしくは王室の財政を支えた「蔵」と見られ、国家財政を支えた「官蔵」と対比される。ただし、魏氏高昌国において国家財政と王室財政を設定することについては、この両者を截然と区別することの限界も含めて、關尾1994, pp.3-19に指摘がある。

(31) 文書内容を一覧表にする作業は、既に關尾により行われている。また併せて、文書に見えるソグド商人らの交易活動についても検討されている。關尾1998, pp.81-84。

(32) この点は、既に關尾により指摘されているが[關尾1998, p.81]、「翟」姓を「高車」、また「供勤大官」を「突厥」と解されている。私は、「翟」姓の人物も「供勤大官」もソグド人であると見ている。Cf. 荒川2010, pp.98-99. また「車」姓ではあるが、「安不六多」というソグド人名が契約文書の保人に確認できることから、その名の「不呂多」も、ソグド語の音写と見られる。吉田豊氏から、史君墓のバイリンガル碑文において、史君の息子の一人として挙げられていた「富鹵多」が、ソグド語の墓誌部分では pr'wtbntk となっており、ソグド人の人名要素（神格名）に pr'wt があったこと、また pr'wt という単体の人名もあったことをご教示頂いた。このことから、「車不呂多」の「不呂多」も、神格名である「pr'wt」の漢字音写と見られる。きわめて珍しいが、「車」姓をもつソグド人である可能性が認められる。

の徴収も「内蔵」が管理していたことがうかがえる。他方で、麴氏高昌国王の周りには、多くのソグド人が「侍郎」として仕えていたことを考えると⁽³³⁾、この「内蔵」も、こうした王に近侍するソグド人が密接に関わっていた可能性は高い。先の「高昌の書記長」が管理する(a)の場と併せ見ると、全体として(1)の対外交易の場は、王もしくは王室とソグド人側近が管理する市場であった可能性は高い。

また本文書に見える「香」取引を見てみると、以下の2点を指摘することができよう。

- ① 取引されている「香」とは、売買される重量から判断して、香木(沈香・白檀などの檀香⁽³⁴⁾)であったと見られる。
- ② 文書の記録を見ると、3月24日に362斤の「香(木)」が、クチャ産とみられる「礶砂(sal ammoniac、中国では薬物として珍重された鉱物。cf. 松田1970)」240斤とともに、「□射蜜畔陁」によりトゥルファンで売りに出されていたことが知られる。また12月27日にも、650斤+ a もの大量の「香(木)」が、同じく「礶砂」201斤とともに、「康牛何畔陁」によりトゥルファンで売りに出されていた。これらは、いずれも前者は「康炎顛」により、また後者は「康莫至」により購入されていた。このようにトゥルファンの「市場」に、「香(木)」が礶砂(クチャ産)とともに持ち込まれていることから、「香木」はソグド商人により西方からトゥルファンにもたらされて売られ、さらにそれを購入したソグド人によって東方(おそらくは河西地域)へ中継交易されていたことがうかがえる。つまり、この「香」は西から東に運ばれてきたものである。

②の結論を踏まえて見ると、7世紀初め頃における内陸ルートでの香木の流れとして、以下のようなルートが予想として浮かび上がってくる。

[インド → ソグディアナ → 東トルキスタン → 河西地域 → 華北]

つまり、沈香・白檀などは、中国に運ばれるのに海域ルートと並んで内陸アジア経由のルートがあったことが確認できる。また、このルートは、先に検討した『エリュトウラー海案内記』に見えている、中国から運ばれる絹製品の流通ルートをほぼ逆に辿ったもので、まさに当時のシルクロードの主要幹線に沿ったものであった。

以上より、沈香・白檀は、麝香のように各地で買い集めた後に、遠くソグディアナや広州(ハーンフー)に送り出す、または運び込むような形ではなく、ソグド人聚落が置かれる主要都市の市場などを拠点にしたソグド商人同士の取引を通じて、小まめに取引を積み重ねてゆくなかで、ユーラシア東方世界に流通したものと見られる。またソグド商人による高級香料・香木取引が中国で活発化するのには、仏教が中国で定着し始め、彼らの交易ネットワークが充実する第Ⅱ期以降であったと考えられる。

(33) 荒川2010, pp.50-57.

(34) 冒頭でも説明したように、沈香と言っても様々な種類と呼び名がある。また蘇合香など、あるいは同様に木材のかたちで運ばれる香料も考えることもできるが、やはりこれだけの重量を取って運搬している以上、相応に値が張る高級香木を対象としていたと考えるのが妥当であろう。

(3) 海上ルートによる高級香木の流通

これに対して、海上ルートによる交易の場合、これまでの研究によれば、イラン系商人らが東南アジア・インドの産地において香木を舶載し、それを中国の港（8世紀段階では広州）に運び込むことが多かったと見ている〔家島 2006, pp.525-532〕⁽³⁵⁾。ただソグド人の海上ルートによる交易については、なお不明な点が多く残されており、その詳細は不明ながらも、現在、中田美絵により研究が積極的に進められている。それによれば、内陸アジア経由のルートと異なり、ソグド商人は、ペルシア商人が途上の港に置いていた拠点に便乗するかたちで、海上交易に従事していたのではないかという〔中田 2015; Nakata 2016〕⁽³⁶⁾。

また、家島により、「波斯船」が広州にまで渡航し、ここに多くの香料が集まっていたこと、さらにそこから蘇州や揚州にまで波斯船が来ていたことが既に指摘されている〔家島 2006, pp.530-532〕。

舶載された商品の中に、ここで検討している沈香や白檀が含まれていたことは言うまでもない。さらに、これらが日本にまで運ばれていたことは、正倉院に伝わる沈香や法隆寺伝来の白檀の存在から明らかである。とくに白檀には、吉田豊、熊本裕の研究により、ソグド語の焼き印が捺され、ペルシア人と見られる人名が刻されていたことが明らかとなっている〔吉田豊 1992; 熊本 1992〕⁽³⁷⁾。

これまで種々検討されてきたように、こうした日本にもたらされた香木は、内陸アジアを経由する交易ルートも想定されている〔東野 1992, pp.174-178; 家島 2006, p.507〕が、これらは海上ルートからもたらされたとして見て良いであろう〔家島 2006, pp.525-528〕。とくにペルシア人の名前が刻された白檀については、ペルシア商人が内陸アジアルートにおいて交易活動をしている痕跡が7世紀以降でも今のところは確認できず、大方は海上交易に従事していたと推測できることから、その可能性は極めて高い。

また海上ルートを通じて、これら的高级香木が日本まで伝来していたとすれば、注目されるのは7世紀末～8世紀初め頃にはインド洋海域世界が形成され〔家島 2006, p.46〕、それとともに南アジア交易圏と東アジア交易圏との重なりが想定できることである〔榮原 2006, pp.62-63〕。また8世紀には、新羅商人による中継貿易活動が認められ〔cf. 東野 1977, 李成市 1997 ほか〕、9世紀には、その交易活動が本格化してくる。すなわち、中国南部の広州～蘇州辺りを接点にして、「南シナ海海域世界」とつながっていた「東シナ海海域世界」で活躍していた新羅商人の中継交易により、こうした香木も日本に入っていた蓋然性は高い。ただし、8世紀中葉の銘がある法隆寺伝来の香木が、中国商人の介在を経たかどうかは別として〔榮原 2006, p.64〕、8世紀という段階で新羅商人の手を通じて日本に将来されたことまで見て良いかどうかは定かではない。専門家による、

(35) 高級香木を取引するペルシア商人の海上交易については、家島に詳しい研究がある。家島 2006, pp.505-532。

(36) ソグド人の海上ルートによる交易活動については、この他にも Grenet や榮新江などの研究がある。Grenet 1996; 榮新江 2007。

(37) 法隆寺伝来の白檀〔法 112・113 号〕に押された焼き印と刻銘。文字はそれぞれ、①はソグド文字、②はパフレヴィー文字であり、その書体は七～八世紀のものとして推測されている。この年代推定は、同香木に記されている墨書銘に見える最古の紀年、天平宝字五年（761）とほぼ合致する。なお②については人名ではなく、「白檀」を表したものだとする説が出されている。矢島 2013。

さらなる検証を必要としよう⁽³⁸⁾。

さらに運河のターミナルになっていた揚州は、海上ルートによりもたらされた「南海品」を、「華北」に送っていた拠点となっていたと考えられる。すなわち、海上ルートから運ばれた香木などは、日本方面とともに、さらに運河沿いに華中・華北方面へ運ばれていたと考えられよう。まさに7～8世紀の長安や洛陽における市場（香行）⁽³⁹⁾は、内陸ルートと海上ルートによってもたらされる香料・香木が取引される、まさに国際市場となっていたと考えられよう。

終わりに

以上に検討してきたように、ソグド商人による香料・香木の取引については、下記のような点を指摘することができよう。

- ① ユーラシア東方世界に流通していた香薬類のうち、麝香・沈香・白檀・丁香・鬱金花は、他の香薬と比べて破格な高値で取引されており、ソグド商人の有力な交易品となっていたと見られる。
- ② 7世紀ぐらいまでのユーラシア東部世界では、陸上世界においてはソグド商人がなかば独占的に国際取引を牽引していたが、上記、高額香薬のなかでも麝香は最高クラスの香料として取引されていた。チベット産およびその近縁に位置する「中国」産のものは内陸アジアルート（ソグディアナ経由、ソグド産麝香と呼ばれる）で西アジアへ、また「中国」産については、所々で買い付けられた後、主に広州（ハーンファー）から海上ルートで西アジア方面に運ばれたと見られる。すなわち、ソグド商人にとっては、麝香はユーラシア東方世界で売りさばいてゆく対象商品というよりも、多くは陸・海上ルートを通じて、西アジア方面に送る商品となっていた。
- ③ 熱帯産の沈香・白檀は、海域交易ルートだけでなく、インド方面より内陸アジアを経由して東方世界に運ばれる交易ルートも認められるが、そのルートはイスラーム帝国が登場するまでの間、シルクロード交易の主要幹線に沿ったものであったと考えられる。
- ④ また沈香・白檀は、麝香のように各地で買い集めた後に、遠くソグディアナや広州に送り出す、もしくは運び込むような形ではなく、ソグド人聚落が置かれる主要都市の市場などを拠点にしたソグド商人同士の取引を通じて、小まめに取引を積み重ねてゆくなかで、ユーラシア東方世界に流通したものと見られる。またソグド商人による高級香料・香木取引が中国で活発化するのには、仏教が中国で定着し始め、交易ネットワークが充実する第Ⅱ期以降であったと考えられる。
- ⑤ 海上ルートによる場合、既に先行研究により、東南アジア・インド産地からの舶載により、中国の港（8世紀段階では広州）に直接運ばれることが多かったと見られること、また、内

(38) 山内晋次氏より、新羅商人の中継取引を想定するには、8世紀段階では時期的になお早いのではないかのご教示をいただいた。

(39) 龍門石窟第1410窟の「南市香行社社人等造像記」（689年）より、ソグド人が洛陽の南市における香料取引を担っていたことがうかがえる。Cf. 榮新江 1999（2001, pp.87-90）；畢波 2004, p.129.

(44) ソグド人の交易活動と香料の流通（荒川）

陸アジア経由のルートと異なり、ソグド商人というよりも、ペルシア商人が主導して海上交易を牽引していたと見た方が妥当ではないかと指摘されている。こうした状況を考慮すると、法隆寺伝来の香木（白檀）は、ペルシア商人の姿がほとんど確認できない内陸アジア経由のルートではなく、海上ルートによりもたらされたものであった可能性は高い。

- ⑥ また運河のターミナルになっていた揚州は、海上交易によりもたらされた「南海品」を、「華北」に送っていた拠点となっていたと考えられる。まさに7～8世紀における長安や洛陽における市場（香行）は、内陸ルートと海上ルートによってもたらされる香料・香木が取引される国際マーケットとなっていたと考えられよう。

8世紀以降、次第に海上交易が活発化してくると、言うまでもなく海上ルートでもたらされる香料の量も増大していったと考えられる。それに伴い、内陸アジア経由による香料流通は、西アジアからもたらされるようになる乳香や、チベット産の麝香などの一部の高級香料を別として、熱帯産高級香木である沈香・白檀などに関しては、相対的に低下したのではないと思われる。こうした状況のもとに、前掲のイスラーム史料に伝えられている、香木の多くは中国（の広州）を経由して西アジアへ運ばれるような体制が構築されていったと見られる。

(略号)

『図文』=唐長孺（主編）、中国文物研究所・新疆維吾爾自治区博物館・武漢大学歴史系（編）『吐魯番出土文書』1-4、文物出版社、1992-1996。

『文書』=国家文物局古文献研究室・新疆維吾爾自治区博物館・武漢大学歴史系（編）『吐魯番出土文書』1-10、文物出版社、1981-1991。

(引用文献)

荒川正晴（2010）『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋大学出版会。

池田温（1975）「中国古代の租佃契（中）」『東洋文化研究所紀要』65, pp.1-112。

池田温（1979）『古代籍帳研究』東大出版会。

池田温（2014）『唐史論攷－氏族制と均田制－』汲古書院。

榎一雄（1980）「ソグド商人の手紙」『講座敦煌』1 大東出版社, pp. 263-275。

小谷仲男（1996）『ガンダーラ美術とクシャン王朝』同朋舎出版。

小谷仲男（1999）「クシャン王朝の勃興（1）（2）」同『大月氏』東方書店, pp.85-132。

熊本裕（1992）「Pahlavi 刻銘について」東野治之『遣唐使と正倉院』岩波書店, pp.184-185。

柴原永遠男（2006）「古代の難波をめぐる国際交易ネットワーク」『都市文化研究』8, pp.60-71。

シェーファー, E. H. (著), 吉田真弓 (訳) (2007) 『サマルカンドの金の桃－唐代の異国文物の研究－』勉誠出版。

白須浄真（1984）「魏氏高昌国における上奏文書試釈－民部・兵部・都官・屯田等諸官司上奏文書の検討－」『東洋史苑』23, pp.13-66。

關尾史郎（1994）「トゥルファン出土高昌国税制関係文書の基礎的研究（7）－條記文書の古文書学的分析を中心として－」『人文科学研究』（新潟大学人文学部）86, pp. 1-26。

關尾史郎（1998）『西域文書からみた中国史』世界史リブレット10, 山川出版社。

東野治之（1992）「香木の銘文と古代の香料貿易」同『遣唐使と正倉院』岩波書店, pp.161-183。

東野治之（1977）「鳥毛立女屏風下貼文書の研究－買新羅物解の基礎的考察－」同『正倉院文書と木簡の

研究』塙書房.

土肥祐子 (2017)『宋代南海貿易史の研究』(汲古叢書;138), 汲古書院.

内藤みどり (1988)『西突厥史の研究』早稲田大学出版部.

中田美絵 (2015)「天竺から唐に来たソグド人－米准那の例を中心に－」『中央アジア学フォーラム』(2015. 12. 12).

ハンセン, V. (著)、田口未和 (訳) (2016)『図説シルクロード文化史』原書房.

ピレンス, H. (著)、佐々木克巳 (訳) (1970)『中世都市－社会経済史的試論－』(創文社歴史学叢書) 創文社.

福島恵 (2017)「東アジアの海を渡る唐代のソグド人」同『東部ユーラシアのソグド人』汲古書院, pp.304-319.

ポランニー, K. (著)、玉野井芳郎・中野忠 (訳) (1980)『人間の経済Ⅱ－交易・貨幣および市場の出現－』岩波書店.

松田壽男 (1970)「天山に産する礧砂について」『古代天山の歴史地理学的研究』早稲田大学出版部, pp.399-413.

村川堅太郎 訳注 (1993)『エリュトラー海案内記』(中公文庫) 中央公論社.

矢島洋一 (2013)「法隆寺香木パフラヴィー文字刻銘再考」『奈良女子大学研究教育年報』10, pp.9-14.

家島彦一 (1991)『イスラム世界の成立と国際商業－国際商業ネットワークの変動を中心に－』岩波書店.

家島彦一 (2001)「イスラーム・ネットワークの展開」石井米雄編『岩波講座東南アジア史3－東南アジア近世の成立－』岩波書店.

家島彦一 (2006)『海域から見た歴史』名古屋大学出版会.

家島彦一 訳注 (2007)『中国とインドの諸情報2 第二の書』(東洋文庫 769) 平凡社.

山内晋次 (2003)『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館.

山田憲太郎 (1976)『東亜香料史研究』中央公論美術出版.

山田憲太郎 (1979)『香料博物事典』同朋舎.

吉田豊 (1992)「ソグド語の焼印について」東野治之『遣唐使と正倉院』岩波書店, pp.185-187.

吉田豊 (1997)「ソグド語資料から見たソグド人の活動」『中央ユーラシアの統合』(岩波講座世界歴史 11) 岩波書店, pp.227-248.

吉田豊 (1999)「中央アジアオアシス定住民の社会と文化」間野英二編『アジアの歴史と文化』8 (中央アジア史), 同朋舎, pp.42-54;

吉田豊 (2011)「ソグド人とソグドの歴史」曾布川寛・吉田豊編『ソグドの美術と言語』臨川書店, pp.8-78.

吉田豊・荒川正晴 (2009)「ソグド人の商業 (四世紀初)」歴史学研究会編『世界史史料3 東アジア・内陸アジア・東南アジア I』岩波書店, pp.342-345.

吉田豊・森安孝夫・新疆ウイグル自治区博物館 (1989)「麹氏高昌国時代ソグド文女奴隷売買文書」『内陸アジア言語の研究』4, pp. 1-50.

李成市 (1997)『東アジアの王権と交易』(AOKI LIBRARY 日本の歴史) 青木書店.

De la Vaissière, É. (2002) *Histoire des Marchands Sogdiens*. Paris, Collège de France (trans. by James Ward, Sogdian Traders: A History, *HdO*. Section eight, Central Asia; vol. 10, Brill, 2005).

Grenet, F.(1996) Les marchands sogdiens dans les mers du Sud a l'époque pre-islamique, in Institut français d'études sur l'Asie centrale, *Cahiers d'Asie Centrale*, Éditions ÉDISUD 1996, pp.65-84.

Hansen, Valerie (2012) *The Silk Road: A New History*, New York: Oxford University Press.

Harmatta, J.(1979). Sogdian Sources for the History of Pre-Islamic Central Asia, *Harmatta, J (ed.)*

- Prolegomena to the Sources on the History of Pre-Islamic Central Asia*, Budapest, pp.153-165.
- Livšic, V. (2006) The Sogdian Wall Inscriptions on the Site of Afrasiab. M. Comparesi, É. de la Vaisière (ed.), *Royal Nauruz in Samarkand, Proceedings of the conference held in Venice on the pre-Islamic paintings at Afrasiab, Supplemento no 1 alla Rivista degli Studi Orientali, nuova serie vol. 78*, Pisa·Roma: Accademia Editoriale, pp.59-74.
- Nakata, M. (2016) A Sogdian from the Sea : Maritime Transport in the 8th Century as Seen from *The Pilgrimage Record of Vajrabodhi*, Global History Workshop: "Globalization from East Asian Perspective", 2016.3.15, the Institute for Academic Initiatives, Osaka University and University of Oxford Center for Global History.
- Sims-Williams, N. (2001). The Sogdian Ancient Letter II , *Philologica et linguistica : Historia, Pluralitas, Universitas : Festschrift fur Helmut Humbach zum 80. Geburtstag am 4. Wissenschaftlicher Verlag Trier*.
- 荣新江 (1999) 「北朝隋唐粟特人之迁徙及其聚落」『国学研究』6, pp.27-86 [再録: 同『中古中国与外来文明』北京, 生活·读书·新知三联书店, 2001, pp.37-110].
- 荣新江 (2007) 「魏晋南北朝隋唐时期流寓南方的粟特人」『古代中国 社会转型与多元文化』上海人民出版社, pp.138-152.
- 荣新江 (2014) 『中古中国与粟特文明』北京, 生活·读书·新知三联书店.
- 王素 (1997) 『吐鲁番出土高昌文献编年』新文丰出版公司.
- 葛承雍 (2016) 「北朝粟特人大会中祆教色彩的新图像 - 中国国家博物馆藏北朝石堂解析」『文物』2016-1, pp.71-84.
- 姜伯勤 (1994) 『敦煌吐鲁番文书与丝绸之路』文物出版社.
- 朱雷 (1982) 「魏氏高昌王国的“称值钱” - 魏朝税制零拾 - 」『魏晋南北朝隋唐史资料』4, pp.17-24.
- 郑炳林 (2011) 「晚唐五代敦煌寺院香料的科徵与消费 - 读《吐蕃占领敦煌时期乾元寺科香帖》札记」『敦煌学辑刊』2011-2, pp.1-12.
- 畢波 (2004) 「龍門石窟南市香行社社人等造像記」荣新江·張志清主編『從撒馬爾干到長安 - 粟特人在中国的文化遗迹』北京图书馆出版社, pp.128-129.
- 林天蔚 (1960) 『宋代香藥貿易史稿』香港, 中国学舍.

表1 称価銭文書に見える取り引き一覧表（※の税額は、文字欠落のために推補した額）

商品	売買重量	月日	売り手	買い手	税額	備考
金	9両半	正月二日	翟陀頭(ソグド人)	□頭祐	2文※	
	20両	正月五日	□□順	康莫毗多(ソグド人)	7文半	絲50斤と一緒に売買
	8両半	三月	何阿倫遮(ソグド人)	供勤大官(ソグド人)	2文	
	9両	三月二四日	曹遮信(ソグド人)	何刀(ソグド人)	2文	
	4両	八月四日	康畢迦之(ソグド人)	車不呂多(ソグド人?)	1文※	不呂多はソグド語pr'wtの音写
		十月十九日	康那寧材(ソグド人)	曹諾提□(ソグド人)	4文	
銀	2斤	正月一日	曹迦鉢(ソグド人)	何卑尸屈(ソグド人)	2文	
	2斤5両	正月一日	曹易婆□(ソグド人)	康炎毗(ソグド人)	2文	
	5斤2両	正月三日	何阿陵遮(ソグド人)	安婆□(ソグド人)	5文	
	8斤1両	三月	翟陀頭(ソグド人)	何阿倫遮(ソグド人)		
	2斤1両	四月五日	康□□(ソグド人)	何刀胡迦(ソグド人)		
	2斤	四月後半	□□順	何破延(ソグド人)	2文	
香(木)	572斤	正月三日	翟薩畔(ソグド人)			
	252斤	正月後半	康不里昂(ソグド人)	康婆何畔陀(ソグド人)		
	362斤	三月二四日	□射蜜畔陀(ソグド人)	康炎顛(ソグド人)	15文	礧沙240斤と一緒に売買
	800斤	四月後半			22文	石蜜31斤と一緒に売買
	172斤	六月一〇日	□□陀(ソグド人)	何炎(ソグド人)	4文	
	92斤	八月前半		康炎延(ソグド人)	2文	
	650+a斤	十二月二七日	康牛何畔陀(ソグド人)	康莫至(ソグド人)	21文	礧沙201斤と一緒に売買
33斤		安符夜門延(ソグド人)	安符夜門遮(ソグド人)	8文		
礧沙	172斤	正月後半	安□□(ソグド人)	康炎(ソグド人)		
	50斤	正月二二日	曹破延(ソグド人)	安那寧畔(ソグド人)		銅41斤と一緒に売買
	240斤	三月二四日	□射蜜畔陀(ソグド人)	康炎顛(ソグド人)	15文	香362斤と一緒に売買
	11斤	三月二五日	白妹(クチャ人)	康阿攬牛延(ソグド人)		
	251斤	六月五日	康妹(ソグド人)	石莫□(ソグド人)	6文	
	201斤	十二月二七日	康牛何畔陀(ソグド人)	康莫至(ソグド人)	21文	香650+a斤と一緒に売買
鬱金根	87斤	三月後半	康烏提畔陀(ソグド人)	□不呂多(ソグド人?)	1文	
葉	144斤	正月五日	康夜虔(ソグド人)	寧祐憲		
絲	50斤	正月五日	□□順	康莫毗多(ソグド人)	7文半	金20両と一緒に売買
	10斤	四月五日	康□希迦(ソグド人)	康頭顛(ソグド人)	1文	
	80斤	四月後半	何刀(ソグド人)	白迦門賊(クチャ)	8文	
	60斤	五月二日	車不呂多(ソグド人?)	白迦門賊(クチャ)	3文	不呂多はソグド語pr'wtの音写